



土砂が堆積したクラダム。発電が阻害され、人々への生活への影響は深刻だ



育林サイトを視察する佐藤専門家(右)とJICAマラウイ事務所の伊藤英樹職員。住民のニーズや土地の環境に応じ、アグロフォレストリーや既存植生の保全育成など異なる手法を採用している。「マラウイの農村の状況を知られば知るほど、自然と人間の密接なかわり、共生の重要性を感じます」と伊藤職員

「誰のために植える木なのか」市街地から車で2時間、ブランタイヤ郊外にあるシレ川中流域のクラダムに着いた。シレ川は、地元の人々にとって貴重な水源だ。「マラウイの電力は約95%が水力発電で、そのほとんどすべてがシレ川中流域にある3つのダムによって賄われています」とプロジェクトのチーフアドバイザーを務める佐藤英樹・JICA専門家は話す。「今はまだ発電に必要な水が十分にありますが、乾期になると水量が減る上に、雨期に畑などから流れ出した土砂が堆積し、貯水量が著しく減少してしまいます」。シレ川中流域の自然環境の悪化、ダム湖に堆積する土砂は発電への障害となり、国全体の開発にも影響が及んでしまう。実際にホテルでも、突然、停電になっってしまった。



マラウイ湖の南端から流れるシレ川

日本から飛行機を乗り継いで25時間。長旅を終えてタラップを降りると、目の前に、真っ青な空と赤茶けた大地が広がっていた。ここは、アフリカ南東部の内陸国マラウイ。国土は日本のわずか3分の1。しかし、その小ささを感じさせないほど、目の前に広がる自然は雄大だ。

国内最大の商業都市、ブランタイヤの空港から車を走らせると、舗装された道路の脇で野菜や果物などをごさぎに並べた、即席市場が開かれていた。その先にはどこまでも続く草原。いわゆる「アフリカ」の景色を眺めながら、まっすぐに延びる道をひたすら進んでいくことに爽快感すら覚えた。

しかし一歩横道に入ると、そこはでこぼこの道なき道だった。四輪駆動車の車体がガタガタと大きく揺れる。雨期の終わりも間近になった4月下旬、雨の恵みを受けて育った雑草に覆われた道。だが、遠くに臨む山々にふと目を向けると、木がほとんど生えていないことに気付く。そう、マラウイは今、深刻な森林資源の減少に直面している。

の人々の生計向上、いわゆる「コミュニティフォレストリー」の取り組みを推進すべくモデル開発を進め、2007年から「シレ川中流域における村落振興・森林復旧プロジェクト」への支援を開始した。

### 村に木がない 畑に起った変化



雨で土が削り取られ、大規模なV字の溝(ガリ)が発生した村。森林の減少で降雨を吸収する場がなくなってしまったことが原因だ

マラウイ  
from MALAWI

## 住民の住民による住民のための 取り組みを

青々と緑に覆われていた山から、森が消えていく。アフリカ南東部のマラウイでは急速に森林が減少し、土壌浸食が深刻化している。そして、その状況を打開するために立ち上がった地域の人々。JICAの協力とともに進められているコミュニティフォレストリーの現場取材した。



a.土壌浸食を防ぐため、等高線栽培に必要な技術を学ぶ／b.トウモロコシの収穫を喜ぶ人々／c.ガリ対策のため、土砂の流失を防ぐチェックダムを設置

# 森に生きる

ードファーマーのシステムだ。リードファーマーとは、村で選ばれた研修の責任者。普及員たちから指導を受け、今度は、その村に住む彼ら自身が他の住民への研修の講師となる。ムテマ村のエノック・マロヤ村長は「リードファーマーは住民の一員。何か問題があればすぐに駆け付け、解決策を講じることができる頼もしい存在です」と太鼓判を押す。約200世帯が暮らすこの村では、土壌浸食が原因で農作物の収量が激減。しかし、研修を通じて等高線栽培の手法を学び実践した結果、トウモロコシの収穫量が5倍にも増えた農家も出てきた。リードファーマーを務めるセシリア・アルファゼマさん（土壌浸食対策担当）は「収穫時期には、家がトウモロコシでいっぱいになるんです。これからもたくさんの人に研修に参加してもらって、村の発展に役立てたい」と意欲を燃やす。

「どうやったら住民たちが動くか、それが一番の課題でした」。そう話すのは、クンボンダ村のスウエディ・ヤム村長。住民全員参加の研修を積極的に促してきた一人だ。リードファーマーと連携して説明会を開き、根気強く成功事例を伝えていった。「これだけ収量が上がったという、明らかに成果が行動を起こす原動力なのです」。金澤弘幸・JICA専門家



育林サイトの状況を確認するマネジメントスタッフのジョセフ・チグイヤさん。「普及員たちとリードファーマーのモチベーションを高め、住民が参加したいと思うようなオプションを提供していくことが役割です」

らすのか、誰のために植える木なのかを人々が理解し、自分たちで継続的に育林を進めていけるようにすることが大切でした」。

そこで採用したのが、「住民の住民による住民のための研修」。これまで、コミュニティを対象にした研修は、相手国の技術者と日本人専門家が内容を企画し、村長や宗教指導者から限られた情報に限られたルートで伝わっていくことが多かった。そこでプロジェクトでは、誰でも参加できるをうたい文句に、掲示板などを活用して参加を呼び掛けたのだ。

培、土壌浸食対策、ビジネスマネジメントなどの研修には、子どもから大人まで、あらゆる世代の人が集まった。その中には、赤ちゃんをおぶった女性の姿も。マラウイで小学校を卒業できるのはわずか3割。彼らにとっては、学ぶ機会そのものが貴重だった。研修に必要なものは、すべてその村にあるものを使う。このお手軽な研修は、住民主体で持続的村落資源管理と利用を目指すJICAの「セネガル総合村落林業開発プロジェクト（PRODEF I）」で開発された手法だ。

農業普及員の一人、17の村を担当するマダリツォ・リベンガさんは、「これまでは移動手段がなく、指導やモニタリングなどすべて



びっしりと書き込まれたリードファーマーのメモ帳は、土と汗で汚れていた



普及員たちとの定期ミーティングに参加する金澤専門家(右)と川元専門家。普及員たちに助言し活動を促進する

は、「リードファーマーと普及員たちが、いい信頼関係を築けているのも成功のカギ。彼ら自身で問題解決をしていく仕組みづくりが進んでいます」と評価する。

**終わりなき挑戦とよそ者の役割**

チワロ村の女性村長エミリー・スングエニさんに案内してもらったと、そこには木につるされた大きなハチの巣箱があった。プロジェクトでは生計向上の手段として養蜂も推進しているのだ。「巣箱づくりから蜜の採取、加工方法まで一から学びました。この村のはちみつを買いたいと言ってくれる人も増えているんですよ」とうれしそうに話す。「実は私も毎年この村からはちみつを買っているんです」と佐藤専門家。甘くてコクのある味がお気に入りだ。「養蜂は蜜源になる花木と巣箱をつくるす木陰がないとできない。人々は木の重要性を認識し、育林活動にも積極的に取り組むようになってきました」。チワロ村の評判を聞き、養蜂を始めたという村も出てきている。

の活動が容易ではありませんでした。プロジェクトからバイクが支給され、1〜2週間に一度のペースで村々を訪問できるようになりました」と話す。彼らは月2回、JICA専門家やプロジェクトの現地スタッフとミーティングを行い、研修のスケジュールや内容、成果などについての議論を重ねている。

**真のニーズとはー思い切った計画変更**

09年初め、プロジェクトは大きな転機を迎える。「当初の活動は森林の再生をベースにしていきました。しかし土地利用形態の調査や住民からのヒアリングを通じて、彼らにとっては木がないことよりも、日々の食料を確保することが喫緊の問題だったのです」と佐藤専門家。彼らの畑から土壌浸食が起り、そのために十分な収穫を得られないこと。そして、適切な対策を講じれば、収穫を増やせること。「この事実を住民が理解し、自分たちの取り組みにより生活の糧が確保できれば、土壌浸食対策の効果も早期に実現できる近道になると気付いたのです」。そこで思い切って、研修の目的を「土壌浸食の防止」に特化。対象地域も7カ村から50カ村に拡大した。

さらに新たに導入したのが、期を生き抜くのが難しい手法。しかしカントンビザ村の育林サイトにいくと、4カ月前にまいた種から20センチの稚樹に育っていた。「これから乾期に入るので水不足が心配です」とリードファーマー（育林担当）のカナンジ・マティヤスさん。その手には、ほろほろになった一冊のノートが握られていた。「研修で学んだこと、そして、実際に植えた木の生存率など生育の記録を書き込んでいっているんです」。研修で学んだ技術を生かし、プロジェクトが関わっても活動を続けていく。その姿はとても頼もしく見えた。

今年243カ村で研修が実施される予定だ。「私たちにできることは、違うやり方やもっと簡単な

で良い方法を考えて、村の人たちを選択肢を示すこと。そこに私たちよそ者の役割があると思っています」と川元美歌・JICA専門家。JICAは2万5000世帯にも及ぶ住民たちが動く仕掛けを作り、彼らの活動を陰から支え、見守る存在となっている。

マラウイの村々を歩いていると、人工的に作られたものはほとんどない。人間は自然に生かされているのだと実感できる空間だった。そんな環境の下に生まれ、育ってきた彼らにとって、自然と共生していくために奮闘することとは、当然のことなのかもしれない。遠いアフリカの国で、コミュニティ・フォレストリーの原点を見たような気がした。



巣箱の状態をチェックするチワロ村のピーター・チャボエラさんは「村のすべての人々が恩恵を受けられるように活動を拡大していきたい」と、リードファーマー（育林担当）としての意気込みを見せる

クンボンダ村のヤム村長（写真左）と土壌浸食対策担当のリードファーマーの2人（写真右）の連携は地域の中でも光を放つ。「あらゆる活動を充実させるためには、彼ら以外にも人材が育ってくれば」と村長は話す

